

# 現代俳句 やまこ

第 86 号



四海楼（上関町）

山口県現代俳句協会

## 第31回 山口県現代俳句協会勉強会のご案内

1. 日 時 令和4年10月12日（水曜日）  
受 付 10：00～  
投句締切 12：00（1人2句）  
勉 強 会 13：00～15：00
2. 会 場 山口県教育会館会議室 I
3. 吟 行 先 山口県立美術館  
雪舟と室町文化  
I 将軍家の襖絵 II 雪舟と狩野派
4. 申 込 先 〒751-0863 下関市伊倉本町14-3 平川扶久美 宛  
※葉書にてお申込み下さい（TEL 083-254-3732）
5. 申込締切 令和4年10月7日（金）
6. 参加料 無料（但し、美術館鑑賞料は自己負担となります）

## 第27回 山口県現代俳句賞について

平素より山口県現代俳句協会にご協力いただき有り難うございます。  
さて、第27回山口県現代俳句賞の応募と選考方法は、昨年と同様の  
方式で実施することになりました。

1. 作 品 20句（この1年間の作品で、既発表、未発表を問いま  
せん。但し、結社賞等の受賞作品は外してください。）
2. 締 切 り 令和5年1月20日（厳守）
3. 送 付 先 〒751-0863 下関市伊倉本町14-3 平川扶久美 宛
4. そ の 他 ①無記名清記の上、外部の選考委員に依頼いたします。  
②作品には題名と作者名を忘れずに記入してください。

御多忙とは存じますが、全会員により、候補作家の推薦を頂きたいと存じます。  
よろしく願いたします。機関誌「現代俳句やまぐち」の会員作品「85号・86  
号」より候補作家として相応しい方を2名推薦頂きたいと存じます。

締め切りは、令和4年11月30日といたします。ハガキにて下記までお知らせく  
ださい。

なお、自薦も歓迎します。その場合には、上記1～4に従って直接作品を応募  
ください。

## 第86号目次

第三十一回山口県現代俳句協会勉強会案内	
第二十七回山口県現代俳句賞について	
令和4年度第一回理事会報告	1
第三十二回山口県現代俳句大会・総会報告	2
第二十六回山口県現代俳句賞受賞作品	4
同選考評	5
第八十五号会員作品鑑賞	10
”	10
榎田 敦子	10
岡田 薫	12
会員作品	14
第四十回中国地区現代俳句大会報告	21
平川扶久美	21
作品募集	22
令和4年度第二回理事会報告	22

表紙「四海楼（上関町）」

### 令和4年度 第1回理事会報告

- 1 日時 令和4年4月10日（日） 13時30分～
- 2 場所 山口市「小郡ふれあいセンター」
- 3 議案
  - ①令和3年度事業・決算報告について
  - ②令和4年度事業・予算案について
  - ③第32回山口県現代俳句大会・総会の実施について
  - ④第40回中国地区現代俳句大会について
  - ⑤第31回山口県現代俳句勉強会の実施について
  - ⑥第26回山口県現代俳句賞について
  - ⑦その他

（報告者・事務局長 平川扶久美）

## 令和3年度 事業報告

自 令和3年4月1日  
至 令和4年3月31日

年月日	事業内容	場所・摘要
令和3年4月11日	第1回理事会	山口市 「小郡ふれあいセンター」
令和3年	第31回山口県現代俳句協会総会及び大会	※中止
6月13日～6月14日	第39回中国地区現代俳句大会及び勉強会	鳥取市 ※紙上開催
7月25日	第2回理事会	山口市 「小郡ふれあいセンター」
8月30日	会報「現俳やまぐち」84号発行	
10月21日	第30回山口県現代俳句協会勉強会	岩国市 「サンライフ岩国」 吟行地：錦帯橋、吉香公園周辺 18名参加
12月	第26回山口県現代俳句賞応募依頼	
12月12日	第3回理事会	山口市 「小郡ふれあいセンター」
令和4年1月20日	会報「現俳やまぐち」85号発行	
2月上旬	第26回山口県現代俳句賞選者依頼	
3月	第26回山口県現代俳句賞決定	

## 令和3年度 会計報告

自 令和3年4月1日  
至 令和4年3月31日

### 収入の部

科目	予算額	決算額	摘要
本部助成金	140,000	147,000	
地区会費	70,000	60,000	
雑収入	0	0	利子
事業基金	100,000	106,000	寄附金
山口大会残金	0	0	
合計	310,000	313,000	
前期繰越金	382,852	382,852	
合計	692,852	695,852	

### 支出の部

科目	予算額	決算額	摘要
事務費	30,000	18,726	用紙、コピー代
通信費	30,000	10,355	封書、切手
印刷費	140,000	118,800	会報印刷年2回
送料費	30,000	19,236	会報送付
交通費	40,000	32,000	役員交通費助成
事業支出	40,000	22,640	勉強会、資料作成
会議費	10,000	3,400	会議室使用料
雑費	10,000	0	
地区負担金	30,000	29,600	中国地区負担金
事務局維持費	20,000	20,000	
山口県現代俳句賞関係	40,000	40,000	選者謝礼、賞品
予備費	272,852	0	
支出合計	692,852	314,757	
次期繰越金		381,095	
合計	692,852	695,852	

## 令和4年度 事業計画

自 令和4年4月1日  
至 令和5年3月31日

年月日	事業内容	場所・摘要
令和4年4月10日	第1回理事会	山口市 「小郡ふれあいセンター」
5月29日	第33回山口県現代俳句協会総会及び大会	周南市 「周南市文化会館」
6月12日	第40回中国地区現代俳句大会及び勉強会	倉敷市 「倉敷アイビースクエア」
7月	第2回理事会	山口市 「小郡ふれあいセンター」
8月	会報「現俳やまぐち」86号発行	
10月	第31回山口県現代俳句協会勉強会	未定
12月	第3回理事会	山口市 「小郡ふれあいセンター」
12月	第27回山口県現代俳句賞応募依頼	
令和5年1月	会報「現俳やまぐち」87号発行	
2月上旬	第27回山口県現代俳句賞選者依頼	
3月	第27回山口県現代俳句賞決定	

## 令和4年度 予算

自 令和4年4月1日  
至 令和5年3月31日

### 収入の部

### 支出の部

科目	前年度 決算額	予算額	摘要	科目	前年度 決算額	予算額	摘要
本部助成金	147,000	140,000		事務費	18,726	30,000	用紙、コピー代
地区会費	60,000	60,000		通信費	10,355	30,000	封書、切手
雑収入	0	0	利子	印刷費	118,800	140,000	会報印刷年2回
事業基金	106,000	100,000	寄附金	送料費	19,236	30,000	会報送付
山口大会残金	0	0		交通費	32,000	40,000	役員交通費助成
合計	313,000	300,000		事業支出	22,640	40,000	勉強会、資料作成
前期繰越金	382,852	381,095		会議費	3,400	10,000	会議室使用料
				雑費	0	10,000	慶弔費その他
				地区負担金	29,600	30,000	中国地区負担金
				事務局維持費	20,000	20,000	
				山口県現代俳句賞関係	40,000	40,000	選者謝礼、賞品
				予備費	0	261,095	
				支出合計	314,757	681,095	
				次期繰越金	381,095	0	
合計	695,852	681,095		合計	695,852	681,095	

◇第二十六回 山口県現代俳句賞受賞作品◇

不死鳥 保田尚子

生と死のせめぎ合う中花吹雪く 孤愁とは違う秋思の中にいる  
春の野やふくらはぎより眠くなる 漕いでいく夕花野という小宇宙  
草餅を食べて野生に戻ろうか 鬼入れる箱見つからぬ黄落期  
春水を脱いで不死鳥とぶ構え 煮凝りのハイドの顔を溶いてみる  
朧という扉をぐつと押し開ける 家系図の枯野の中に座り込む  
時計草かすかに蕊の歪みあり バンクシー平和塗りこむ文化の日  
方舟の舵切り取って出る地球 冬雲の鬼の岩場に腰掛ける  
徹まとう聖書に命あふれだす レノン忌の多弁なる眼と寡黙な眼  
俳壇の闇を問いたる鉦叩 冬帝の野心を追えば変異株  
体内の黒抜けていく花野かな 冬の薔薇棘という意地残しけり

# 第二十六回山口県現代俳句賞選考評

## ◇ ◆ ◇ 山口県現代俳句賞

木村ゆきこ

長引くコロナ禍に自粛、自粛の中、沈みがちな心を支えてくれているのは俳句だと再確認しつつの選句でした。

1位 「魔女の止まり木」(平川扶久美)

素材の豊かさの中に、平明な言葉の意外な展開が無意識的なエネルギーとなっている奔放さにとらわれました。

ドロップスまたいた大地の芽ぶき出す

夜濯ぎのポロシャツの胸星眠る

マグリットの空の青より栗落ちる

2位 「ダダの空」(山口 智子)

自身の内面を深く見つめながら、感性で掬い上げた表現に気概のようなものを感じました。

心臓のどの部屋も澄み秋の海

白黒を問われて秋の空という

感情の蠢立つ日なり囁むパセリ

3位 「不死鳥」(保田 尚子)

多様なモチーフから紡ぎ出される言葉、秘められた心象の扉を押し開けて触れてみたくなりました。

臆という扉をぐっと押し開ける

体内の黒抜けていく花野かな

鬼入れる箱見つからぬ黄落期

4位 「寒の明け」(木戸 明子)

屋外を舞台にした作品を中心にまとめられており、今、生きているという時間の中に開放感が伝わってきました。

春満月水のおふれる棚田かな

囀も入れてカメラのシャッター音

あみだくじ行きつくところ大花野

5位 「白障子」(野村みどり)

誰もが経験したことのあるような日常に風土性、詩情と品が加わり、しなやかな暮らしぶりがうかがえました。

篝火に大きな地貌年酒汲む

やはらかく言ったつもりの振り花

仰ぎみる五橋の背裏水の秋

## 山口県現代俳句賞

植垣 規雄

1位 「野菊」(尾倉 雅人)

色彩豊かな言葉で、思いを余す所なく展開している。

しなやかな、そして広がりのある句風に惹かれた。

焚火とは風を燃やしているごとく

模様なき白磁の壺や鳥帰る

掬われて自由不自由金魚かな

2位 「魔女の止まり木」(平川扶久美)

箱を開けると、中から色とりどりの句が飛び出してきたと、表現したい作品群である。

考古館に影置いて来る梅雨の蝶

フランスパンのはみ出すリュック小鳥来る

折れそうな魔女の止まり木冬の月

3位 「道祖神」(西村 玲子)

作者の心中に青い田園風景が広がる。移り変わる季節

を確かな目線で詠んだ作品群である。

打水や風の伏線立ち上がる

田圃ごと仕掛け異なる鳥脅し

寒菊や括られて我が影のうち

4位 「不死鳥」(保田 尚子)

生と死という永遠のテーマへ構えずに、自身の身体感

覚で臨んでいる。そしてそれを吸収し昇華している。

鬼入れる箱見つからぬ黄落期

煮凝りのハイドの顔を溶いてみる

冬雲の鬼の岩場に腰掛ける

5位 「初時雨」(堀口 孝子)

自身の生活に添った素直な句風が好ましい。

親と子の見分け難きや秋燕

名月やずしりと重き稚の尻

海に向く燈の石段木の実落つ

## 山口県現代俳句賞

川崎益太郎

今年も昨年同様に全二十一編は、レベルが高く、順位

付けに苦労した。

1位 「処暑の寺」(阿部 友子)

少子高齢化が進む土地で暮らす日常を、新しい視点を

入れながら、二十句すべてが、破綻なく詠まれている。

真剣に生きて叱られ春の泥

仏像の胡坐崩して処暑の寺

故郷はつぶれた柿の匂いなり

2位 「不死鳥」(保田 尚子)

日常の生活から社会に鋭い目を向けた、斬新な句が多

く、一位にと思ったが、中八の句が一句あり、最後まで

迷った末、劣後させた。



春水を脱いで不死鳥とぶ構え

俳壇の闇を問いたる鉦叩

冬帝の野心を追えば変異株

3位 「初時雨」(堀口 孝子)

破綻なくきれいにまとめられた二十句だが、全体的に、やや、おとなしい句が多い気がした。

側溝をすべる水にも花筏

余り苗育つ水口音高し

箒目を崩すがほどの初時雨

4位 「野菊」(尾倉 雅人)

深読みかも知れないが、二十句全てに、愛のため野菊に身を落した女性の姿が読める、今ならではの二十句である。

けんか風通過儀礼の真つ只中

何もかも捨てて野菊となりにけり

限界の少女の心鬼捨て子

5位 「げじめ」(河内山裕見)

日々進む老いを、いろんな角度から詠まれた二十句である。中八が二句、中六が一句と自在。元気である。

老い知らず齒痛の波にそぞら寒

見るたびに見粉ふ皴はマスク跡

普通とは自問自答年迎ふ

## ◆◆ 推薦コメント

月森 遊子

1位 「ダダの空」(山口 智子)

作品タイトルに目を奪われ、調べる中に筆頭句の景が浮かんだ。その他、共感の句も多く、豊かな感受性に惹かれた。

裏山の木々に音感秋の水

白黒を問われて秋の空という

風鈴の感性風が持ち去れり

2位 「凜として」(中田 裕子)

句群の領域が広く、詩的な情趣の句も多く、ベテランの感じを受けた。

パレットに溶く色彩小鳥来る

生と死の迫間ことりと寒卵

摺り足で来る浅き春母の忌へ

3位 「不死鳥」(保田 尚子)

生命に触れる心象句の他、独自の詩表現の句が目立った。生と死のせめぎ合う中花吹雪

漕いでいく夕花野という小宇宙

家系図の枯野の中に座り込む

4位 「道祖神」(西村 玲子)

日常の身近の視野に広がりがあり、詩趣に富む句が多かった。

田に注ぐ水の五線譜蛙鳴く

打水や風の伏線立ち上がる

喪のうちのポインセチアの置き所

5位 「色ある風」(河野 悦子)

日常の事象の機微に触れた句表現に、独自性があり豊かな詩情を感じた。

遺言めく文となりたる桜の夜

嬉嬉と赤やがては鬼気に曼珠沙華

コスモスに触れて色ある風となる

## ◆ ◆ 審査小感

久行 保徳

コロナ禍の中ながら、二十一篇の意欲的な応募作があった。第一席に推した「魔女の止まり木」(平川扶久美)は、粒の揃った作品の構成でした。その中で、

夜濯ぎのポロシャツの胸星眠る

折れそうな魔女の止まり木冬の月

ドロップスまいた大地の芽ぶき出す

等々のユニークな作品が目にとまりました。切り取り角度の妙味の中に、その力量を十分に見せていただきました。

第二席の「処暑の寺」(阿部 友子)では、

真剣に生きて叱られ春の泥

仏像の胡坐崩して処暑の寺

故郷はつぶれた柿の匂いなり

等に、視線の確かさと濃密な佇まいをシリアスに垣間みせた力作は快さをおぼえました。

第三席には「不死鳥」(保田 尚子)を推しました。

春水を脱いで不死鳥とぶ構え

俳壇の闇を問いたる鉦叩

冬帝の野心を追えば変異株

等の作品の少し違う角度からのユニークさに惹かれましたが、やや強引な作品も散見されました。が、旨くまとめている感じでした。

第四席には「タダの空」(山口 智子)を推しましたが、可成りのハイレベルの作品も多く見られました。

白黒を問われて秋の空という

心臓のどの部屋も澄み秋の海

雪降るや二人に違う時間過ぐ

その作品が内蔵する問題意識を痛く感じました。

続いての「青林檎」(上石久美子)では、

秋澄む日読めぬ点字に触れている

梨を剥くさっきの嘘を滴らし

蜥蜴居る同じ動悸を持って居る

等々の諸作に注目しました。

振り返って、何れにしても応募作品二十句を揃える事は容易いことではありませんが、皆さんの意欲を今回もいただきました。

今回の応募作品20句（21篇）を、事務局で無記名清記のうえ、各選者に1位から5位及び佳作5篇を選させていただきました。

その結果、下記のとおりとなりました。高得点の「不死鳥」に受賞が決定いたしました。

多数の応募ありがとうございました。

尚、選後評の作者名は事務局で挿入しました。

## 第26回山口県現代俳句賞 応募作品評価票

作品名	選者名	木村	植垣	川崎	月森	久行	採点	作品名	選者名	木村	植垣	川崎	月森	久行	採点
1	野 菊		5	2		○	7	12	霜 の 家			○			
2	初 時 雨	○	1	3			4	13	月 の 客					○	
3	水 の 国					○		14	周 防 高 森					○	
4	処 暑 の 寺	○	○	5		4	9	15	春 隣				○		
5	道 祖 神	○	3	○	2		5	16	色 ある 風				1		1
6	秋から冬へ		○	○				17	凜 として	○			4	○	4
7	ダダの空	4			5	2	11	18	寒の明け	2	○		○		2
8	け じ め			1	○		1	19	青 林 檜		○	○		1	1
9	魔女の止まり木	5	4		○	5	14	20	不 死 鳥	3	2	4	3	3	15
10	八代の鶴							21	白 障 子	1	○		○		1
11	淑 気	○		○											

(註) ○印は佳作

# 作品鑑賞（第八十五号）

## 楨田 敦子

麦踏みや父の足跡ついてゆく

石川 芳己

遠く記憶を辿れば麦踏みをしている父が居る。実直丁寧なその後ろ姿を追う詠者。お父様への感謝の気持とこれから進む道への決意も眼前に広がる。味わい深い一句。

舞ひながら浄土と思ふ雪婆

伊藤 愛子

空中を青白く光ながら浮遊する綿虫。雪婆が飛ぶと雪が降る。大空深く降って来る雪を見ながら浄土へ思いを馳せる。その臨場感を鋭い感覚で捉え、書ききった。

初冬の潮満つる川鵜の郡るる

井原三都子

破調の絶明。二つに分かれた景を「満つる」「群るる」の動詞が結びつける。初冬の景色は、「潮」「鵜」で粋めきあってくる。やがて来る厳冬へ具象の二物がひかる。

騙されてしまいたき日の酔芙蓉

上石久美子

精神的苦痛を感じ、苦しい、辛い、やるせないという心情が、酔芙蓉で見事に表現された。騙されても良いという奥ゆかしい優しさは、移ろう花の色に転写された。

コンサート跳ねて土筆の土手帰る

上重 石峰

コンサートが終わり、土手の土筆も詠者も心踊らせている。懐しい情景を彷彿とさせる土筆やコンサートの演

目の数々。ノスタルジックな時を鑑賞者に与えてくれた。

石路の花斜め斜めを生き抜きぬ

上野 昭子

斜めのリフレインが、一句を引き締め、強い覚悟を物語る。人生の風雪に耐えながら生き抜き姿を、路傍に可憐に咲く石路の花の柔かな瞬きは、生きる支えでもある。

青い地球写るのはかの菊慈童の瞳

上原 祥子

菊慈童とは、菊の露を飲み不老長寿になった人。又、ラテン語、イタリア語に由来するテラは青く美しい。地球讃歌も聞こえて来る大景を、小さな瞳の中に再現した。

ものの芽のほぐれるを待つ淋しがり

岡田 薫

寒い冬を耐えたものの芽たち、春の風を待ち、ほぐれてゆくのである。瞳差しは、優しくしつとりと広がる。

もう一度弾けてみたい鳳仙花

尾倉 雅人

花色は豊富で夏の花として植えられる。種は熟すと軽く触れるだけではじけ飛び散る。島倉千代子の代表曲にもあり、叶わぬ夢を追う刹那を存分に言い尽くされた。

春耕や職歴曰く言い難し

片山 淳子

春を迎える田圃に欠かせない春耕。トラクターに乗り一日中無心に風に吹かれる。達成した境地に「曰く」「言い」の頭韻はリズムカルに響き、新鮮かつ効果的。

筍の二本ころがる勝手口

河村加南子

「筍置いとくね。」声まで聞こえてくる一句。土の匂い

の掘りたての筍が二本置いてある。日常の庶民の台所の  
一コマを活写し、瑞々しい筍は明るく輝いた。

その中に父の声する冬木の芽 河村 正浩

繊細で美しく凜然とした冬木の芽。その中に聞き取れたお父様の声。鋭角的に捉えられ、抒情は大きく広がった。俳句という器の広さ、許容量の深さを改めて実感。

コスモスのどこも正面揺れやまず 木戸 明子

コスモスは、どの方向から見ても笑顔で挨拶してくれる。総身で喜びを表現するコスモスの姿を直視された。

誰を待つおいでく〜とススキ原 木村 幸子

淋しがり屋のススキを詠まれた一句。広い野原のススキ達は人恋しと揺れる。おいでく〜のリフレインが、物語を生み、悠久の時は穏やかに過ぎてゆく。心惹かれる句。

カーテンに涼風吸わせ未来向く 河内山裕見

詩的表現「カーテンに風を吸わせる」に意表をつかれた。涼風を思い切り吸ったカーテンと共に前向きになる。

もう少し縫ふ糸通す夜長かな 河野 悦子

秋の夜、縫い物を続ける詠者が見える。縫糸の長さは夜の長さかもしれない。心地良い夜だから、縫物も進む。

風へ詩人の貌の道祖人 清木たかし

疫病や悪霊を防ぐ神道祖人。自然を尊びつつ、風土性に光を当てられた。「詩人の貌」に好奇心をそそられた。

認知症検査終りて冬うらら 武居 絹枝

自動車運転免許更新時に受ける検査のひとつである。新しい免許証をいただいた安堵感が良く伝わる。生活手段のひとつでもある車を続けて運転できる喜びが見える。

鬼灯をさけば袋の中ひろき 竹本チエ子

着眼点の眩しさに感動。鬼灯の中が広がったという意外性への驚き、季語の器の奥行を丁寧に掲げた一句。

豊かなる世に生き落穂拾いけり 橘 美泉

豊かだからこそ些細な事を大切にす喜びを詠った。落穂を拾う真剣な眼差しは、使い捨て時代への警鐘にも聞こえる。一本の落穂だからこそ感謝や感動が溢れる。

放課後にバッハのフーガうるこ雲 田中 和子

空一面のうるこ雲をバッハのフーガで煎じ詰められた。複雑に模倣、反復される曲調とうるこ雲の見事な共演。

風鈴の音色泳がせウィングラス 田中 賢治

ウィングラスに泳ぐ風鈴の音色、華やかな、涼やかな吟詠である。発想力の自由度、音色の映像化など、弾ける程優雅で、魅力的な仕立てになっている。

すず虫やハートの翅をふるわせる 田中美和子

翅のかたちをハートと捉えた慧眼力。夕闇にメスを招き寄せる為に、二枚の翅をこすり合わせる虫達の恋のロマンスを、4K画像のように輝かせ、浮かび上がらせた。

# 作品鑑賞（第八十五号）

岡田 薫

病む人の木戸にも鍵や十薬咲く 千々和美佐子

介護が必要な知り合いは、毎日が孤独地獄だと言う。

毎日来るヘルパーさんに勝手口の鍵を預け命を繋ぐ。十

薬の真白から連想される人生は少し淋しい。

茹で上げし冬蛸正座致しけり 土手 敏子

大鍋で茹で上げられた蛸がずらりと並ぶ。賑やかな光

景が目に浮かぶ。蛸の「正座」が笑いを誘う。

廃れ屋に咲き誇りたる凌霄花 中田 裕子

かつてこの家には間違いなく幸せがあったのだ。取り

壊すことも儘ならない主の居ない庭に咲き誇る火の色の

凌霄花は、先細りしてゆく現代の象徴かもしれない。

蜘蛛の困や見える風より糸を張る 西村 玲子

頬を撫でる小さな風が吹いた。蜘蛛が糸を垂らして横

切ったのか。無音の風は銀糸となり具現化されたのだ。

夜泣石の右へ寄り添う杜鵑草 野村みどり

山口市湯田温泉に豊後の大内氏から送られたと伝わる

石がある。故国を恋しがり泣くという言い伝えがある。

「永遠」の花言葉を持つ杜鵑草が時折淋しく揺れる。

干潮の浜に人無く年寄りの多い町 久光 良一

年寄りだらけを憂いているわけではない。作者はなかなかの気概の持ち主だ。作者の句に「空振りでもいい今日をフルスイングする」がある。結果より過程が大事。

鳩尾が少し愉快に春の雷 久行 保徳

雷鳴の中、合の手のように吃逆がでる。実は横隔膜は

もうへトへトだ。辛さもユーモアに変換。流石。

わくら葉や切手を貼らぬ手紙あり 平川扶久美

わくら葉を発見して何らかの事情で出しそびれた手紙

のことを思い出されたのだろうか。その感傷も「あり」と客観描写することで読み手の想像を掻き立てる。

人住まぬ庭を占拠の泡立草 藤井 邦子

かつてあったはずの手入れの行き届いた庭はあつとい

う間に泡立草に駆逐される。散歩中、よく見かける光景

にもそれぞれの家族の歴史があったのだ。

黙尽くす土偶の乳房山笑う 藤井八重子

女性をデフォルメした多くの土偶は、只々生命の再生

を祈る。山々の芽吹きは新しい命の誕生を祝う。

秋蝶と急ぎ渡れり交差点 堀口 孝子

多化した蝶がしばしば秋に現れることがある。朝夕の

寒さに翅を休める場所を求めて温い交差点に來たのか。

深夜落雷ひとりみちびく結論 堀 節誉

落雷は近くに遠くに。難解な数式は解けたのだろうか。

「みちびく」は、やるせない深夜の時間経過を勝手に想像してしまふ。人生の数式には解のない事も多い。

枇杷の種こつんと叱責された日よ 榎田 敦子

枇杷を取り合つては種を並べたものだ。「お姉ちゃんでしょ」と妣の声が出た。時が巻き戻されたのだ。

うつし世は夢か檸檬を噛んでいる 松本 清水

この世に生まれた瞬間から、せいぜい百年足らずの命を精一杯生き抜く。時にそれは儚いと気づく。銀河の形の檸檬は前世よりギフトされた命そのものだ。

校長が瓜坊を追う二時間目 三野 公子

母猪と逸れ校庭に迷い込んだ瓜坊を、山へ戻そうとしている校長。視覚聴覚に加え嗅覚まで感じさせられる。

青天に稲刈る匂い撒き散らす 森口 育美

田んぼから吹いてくる風に乗って藁の匂いがする。青空の下で米を収穫する喜びと矜持をいきいきと感じる。

生活と平行に伸びゆく燕 村上 舞香

人家の軒先で営巢する燕。カラスや蛇から我が子を守るためにらしい。必然を「平行に伸びゆく」と表現する感性が若々しい。鳶など、ねじりの位置にいて欲しい。

家系図に踏んばっている家守かな 保田 尚子

どうか、跡継ぎを書き足す事ができたのか。百年後の日本の人口は現在の3分の1という試算がある。

木犀の闇足音を隠しけり 安永 一孝

木犀の花は、一年に一週間ほど自分の存在を強い香りで見せる。その七日間、咽ぶ香りの闇はあらゆる音の侵入を許さない。何かに懺悔するかのよう。

足の向く先に補陀落秋の雲 山口 智子

澄み渡る空の下、行き当たりばったり散歩するのが好きだ。「秋の雲」を眺めているうちに、補陀落浄土に向かって、生かされている事に感謝されたのだろう。

万緑を丸ごとかかえ無人駅 山下 悦子

テレビで見た秘境駅を想像してしまった。溢れる緑の中に短いホームの駅。深呼吸すれば総ての細胞が喜ぶ。

蓮の花鐘撞堂を囲みたり 山戸みえ子

広島の平和公園か。平和の鐘を蓮池がずっと見守っている。永久の平和を誓い誰もが頭を垂れる。八月の早朝蓮の花は合掌を解いてポンと開く。

紅葉してさりとて本音は変わらない 山縣 愁平

くつきりとした映像の次にはつきりとした心象。読み手に委ねられた句は勝手にドラマを作る。

父の忌も母の忌も来て金木犀 松原 君代

実感のこもった句。バタバタと二つの忌日を済ませると、いつしか金木犀の花期に。秋空の下、甘い匂いに触れられ沢山の思い出が語り継がれることだろう。

会  
員  
作  
品

あかとき

井原 三都子

(光)

マスクして黙のけものとなる月光  
遠忌かなカラスこつち向け花えんどう  
白れんの万燈のごと風の谷  
風光る猛禽影をバサと置く  
あかときの夏つばくろよく喋る

春の風

石川 芳己

(周南)

天空の棚田に春の風座る  
若緑眩しく萌ゆる長門峡  
なつかしき母の浜唄島の春  
貝寄風や父の小舟の大漁旗  
春風や片付け済みし四畳半

夕薄暑

上石 久美子

(下松)

寒卵丸み忘れて寝返りす  
新しき句帳の眩し春灯  
草萌えて缶蹴られ音寂し  
老鶯のしなやかな語尾見えており  
白き齒の真顔に直る夕薄暑

雀の子

市川 邦子

(光)

デイサービス的車着く頃雀の子  
トラックを止めて見上げる花樽  
老鶯の二声雨を告げるこえ  
交信は浜昼顔の揺るぎから  
白靴に透き間が少し砂時計

逃水

上重 石峰

(岩国)

風待ちの宿の日溜り孕猫  
牡丹の芽遺骨抱いて島の寺  
愛の日や真砂女と酒と一丁目  
三寒も四温も愛でて山羊の乳  
逃水は初恋のごとありにけり



## 恋猫

上野 昭子

(光)

恋猫の恋のおわりの門の内  
渾身の膝立ち上がる初燕  
存分に生きたつもりの董かな  
三月の山三月の川飽きず  
九段坂時々桜爆発す

## ラグビー

尾倉 雅人

(下関)

生き方を忘れた順に冬眠す  
前夜にはスパイク磨くラグビー等よ  
ラグビーや魔法の薬缶はどこ行った  
母の味棄ててネットのお節かな  
彼の人によく似た顔やどんどの火

## 夏めいて

上原 祥子

(周南)

老いぬれば花に痛みし夕べかな  
時・悼み花撒きにけり道すがら  
東北とうほくに花を零して地震の這ふ  
夏めいて空の鳥など聲もなく  
薄暑かな時をつかんで漢在り

## 曲り角

片山 淳子

(柳井)

アイロンをかける誕生月五月  
夏の蝶どこへ行きつくかは秘密  
曲り角しつかり曲り敗戦日  
秋風を待つ新しい蝶番  
しっぽ持つものの集まる月夜かな

## 秋夕焼

岡田 薫

(光)

風紋は地球の美学春の闇  
尻文字で大きく「ゆ」の字夏休み  
跪けばそこはサバナ秋夕焼  
ゆきずりの鳥しあわせね返り花  
しばらくは地軸にギブス山眠る

## 牡丹の芽

河村 加南子

(周南)

褶先に緑ほんのり一葉忌  
一喉の魚を捌いて凍返る  
冬椿備前の壺にたつぷりと  
溜色の艶しつとりと牡丹の芽  
旅筆笥母の遺品の朧めく

## 賢者の貌

河村正浩

(下松)

天網にあやかり蜘蛛は罫を張りぬ  
踏んばつて蜘蛛は逆さに非常口  
逆さまに蜘蛛はこの世を見てをりぬ  
蜘蛛の罫に蜘蛛は賢者の貌である  
国宝に踏んばつてゐる女郎蜘蛛

## うららかに

木村幸子

(宇部)

妣見舞い日々走った道冬の今日  
鳥雲に主なき庭に花は舞う  
桜散るまさかのまさかダイビング  
プーチンのとなりは日本春嵐  
うららかや庭の手入れと布団干し

## 鯉のぼり

河内山裕見

(宇部)

追憶のミニ鯉のぼりほろ苦き  
思ひやる嘘めぐらせて日脚のぶ  
省略のできぬ過去に春の宵  
不確かな老後の光湯気立てり  
冬銀河詫びても足らぬことばかり

## 初日の出

河野悦子

(山口)

嬉嬉と赤やがては鬼気に曼珠沙華  
初日の出たなびく雲を押し開き  
赤き実へ赤きものへと寒夕焼  
コロナ禍へ窓開け放つ寒夜かな  
日だまりに羽虫の世界彼岸かな

## 菊人形

せいき たかし

(下松)

木の葉降る喪中葉書を風にして  
どんと焼知らぬ児の来て餅をやく  
切手シート三枚程の賀状かな  
ピカソにも勝る出来栄え福笑  
信長も光秀も今菊人形

## 山桜

田中和子

(宇部)

さえずりや千本鳥居ひた登る  
山桜めでる友無き訃報かな  
春の虹馬形埴輪駆けてゆく  
黄水仙関係ないとすねて居る  
野点席青い切子に夏来たる

## 笹舟

竹本 チエ子

(光)

夏兆す跳箱一人とぶ男の子  
昭和の日馳走は大きオムライス  
茶店まで八十八夜の茶を買いに  
山寺の鰐口一打夏に入る  
清明や笹舟池に流しけり

## 若楓

土手敏子

(周防大島)

白木蓮手漉き和紙なるベビー靴  
一国のあるじひたなるでんで虫  
過疎と言うかざに戻りし青岬  
傍日には知れぬ幸せ返り花  
朝なさな襲百態若楓

## 花びら

橘 美泉

(下松)

階<sup>きざし</sup>に花びら鎮め祀り終ゆ  
花蘇芳咲いて父の忌荷風の忌  
初つばめ車先導湖の道  
白き花師に賜はりしアマドコロ  
苑に撮る花嫁御寮立夏かな

## 薫風

中田裕子

(下松)

口笛を五月の風に乗せて行く  
竹の子の伸びるにまかせ峽の里  
裏山の色ふくらます若葉雨  
つばめ来てざわつく軒となりにけり  
薫風に弾みをつけてボール打つ

## 猫の日

千々和 美佐子

(下松)

花吹雪地上に暫し曼陀羅図  
背鳴るラヂオ体操春の風  
猫の日や二月の猫はよく笑う  
火の匂い纏うて戻る野焼かな  
万愚節友は優しい嘘をつく

## 紙雛

西村玲子

(下松)

神主の間隔開けと豆を撒く  
紙雛の眼のない顔の視線かな  
耕運機静かに止まる露の臺  
菜の花のお堂の玻璃を拝むかな  
巡礼の二手に別れ春時雨

## 更衣

野村 みどり

(周南)

薫風を両手に量り稚の試歩  
はんなりと言の葉返す藤の花  
自販機の水にも慣れて更衣  
日の翳り遠くに更衣きたる  
春蘭に誘はれたる碑の背裏

## キャンベル缶

平川 扶久美

(下関)

万葉の衣擦れ引いて秋の蝶  
桐一葉天使の羽根は生え変わる  
日を束ねドライフラワー風は秋  
キャンベル缶に根付くハーブや開戦日  
線描の鳩の飛び立つ冬木立

## 長い夜

久光 良一

(田布施)

何もしないでいい好日という退屈  
年賀状出せば寒い訃報が返ってくる  
傘が一本残った雨あがりの傘立て  
縮んだところに大きな海を見せにゆく  
うつつの淵を浮いて沈んで長い夜

## 君子蘭

藤井 邦子

(下松)

ギターの音とぎれとぎれに薄暑かな  
ハーブ咲く丘に登りて深呼吸  
新築の庭に小振りな鯉幟  
小粒なれど媪育てしさくらんぼ  
君子蘭人気を占める美容院

## 後の月

久行 保徳

(周南)

柵田まで九十九折行くねぶの花  
音沙汰の如く艶めく曼珠沙華  
はんなりと千代菊月の橋渡る  
善人の積りのつもり後の月  
方言の睦む出雲の垂り雪

## 初夢

藤井 サカエ

(下松)

初夢はペンギンすいすい空を飛ぶ  
初彫の刀を確かむ指の腹  
日向ぼこシーラカンスと遊びでいた  
終活のアルバム重し時雨けり  
こんなにも雪は真っ白だったんだ

## 夜の秋

藤井八重子

(下松)

口止めの人差指や金魚鉢  
秋草を小さく活けて菓子処  
父母へ句点読点夜の秋  
古民家に二体の小芥子冴え返る  
大昼寝終の住処をここと決め

## 刻々

堀節誉

(宇部)

春驟雨ウクライナの在る地図ひろげ  
濡れているたんぼ銃に持ちかえる  
しゃぼん玉ここからは誰の空でもない  
日脚伸び牛乳に膜ができる  
刻々と泣き上戸となりパセリ食む

## 野水仙

藤井康文

(周南)

初夢と言えど仏の手の平よ  
梅一輪一步も引かぬ白さかな  
廃船の航くかたちして野水仙  
竜天に登るタイヤは野晒しに  
機関車のような貌して野火走る

## 梯梧咲く

榎田敦子

(長門)

夜桜のなかで初産ひとりきり  
藤房のはんなり揺れる音幽か  
梯梧咲くいまが平和か問うている  
ヒロシマ忌平和の俳句すし詰め  
大根の友情きれいに並ぶこと

## 葱坊主

堀口孝子

(周南)

春愁や孫の手紙を読み返し  
流れ藻を食む黒鯉や夏来る  
動物園古りし巢箱の中展示  
腹いつぱい風を呑みたる鯉のぼり  
姿勢よき葱坊主には凝りのなし

## 夏立てり

松原君代

(光)

春夕焼け草の匂いのハーモニカ  
少年の光る産毛や卒業す  
埴輪の口薄く開いて梅の花  
菜の花の小さく青き鞘となる  
風を切る少女の項夏立てり

## 葉桜

松本清水

(長門)

萬愚節わすれる癖をつけている  
さくら鯛食い鮮麗な嘘をつく  
葉桜にいても迷うよしきそくぜくう  
海胆食って戦火が胸に流れこむ  
緋牡丹に気をとりなおし今日が終る

## 風の試練

安永一孝

(山口)

曇天を押し上ぐ藤の花の風  
双塔の俯瞰の街や弥生尽  
風音を闇に残せしこどもの日  
青梅の一夜は風の試練かな  
蝸牛五十を数へ数を足す

## お洒落なマスク

森口育美

(周南)

銀杏降る古刹の庭の内外に  
時雨るるや薄墨色の広がりぬ  
山城を囲みて満つる石露の花  
今日も又チャイムは五時に日脚伸ぶ  
誕生日お洒落なマスク届きおり

## 魂に穴

山口智子

(宇部)

立冬や塩方形に結晶す  
恵方へと錦帯橋のむくりかな  
魂に穴のあるらし枯野ゆく  
かげろうや石の魂彫る石工  
風鈴の感性風が持ち去りぬ

## 凍月

保田尚子

(下関)

青鮫の宿りし木より梅開く  
凍月の互礫の街をさ迷いぬ  
天狼星ひと寄せつけぬクレムリン  
薄氷を踏んで華麗なる闇開く  
春遠し戦禍の街の駅ピアノ

## 新緑

山下悦子

(下松)

鶯の声を背中に試歩の朝  
リハビリの杖休ませる青田風  
ハンマーの音にリズムや青葉風  
今置きし物を探すや養花天  
新緑の山ふくらみて新幹線

## 第40回中国地区現代俳句大会報告

平川 扶久美

令和四年六月十二日に岡山県倉敷市での開催を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症防止のため紙上大会として実施されました。

なお、来年第41回中国地区現代俳句大会は、山口県での開催予定となっております。

俳句大会の上位入賞作品（山口県のみ）

### ◎中国地区連絡協議会賞

帯ぼんと二日の女でき上る  
少年兵桜にされて征きしまま

木村たけま  
藤井 康文

### ◎優秀賞

野も山も動詞でありぬ雪解水  
佛の座少し座っていいですか  
翅とちて天道虫に戻りけり

山口 智子  
石川 芳己  
木村たけま

### ◎秀逸賞

菜の花や村中風になつてゐる

藤井八重子

福笑い疊で死ぬつてこんな顔  
耕しの山より高く鋤を振り

中塚紀代子  
河野 悦子

### ◎久保純夫賞

コロナ禍やチリメンジャコの目が数多  
桜餅みんな女神になつてゐる  
翅とちて天道虫に戻りけり  
少年兵桜にされて征きしまま

竹本チエ子  
橘 美泉  
木村たけま  
藤井 康文

### 各県協会会長賞作品

◎島根県現代俳句協会会長賞  
八月の深海底はレクイエム

藤井 康文

### ◎広島県現代俳句協会会長賞

水仙になれたら兜太にもなれる  
勉強会高得点作品

中塚紀代子

影もたぬほどのふくらみ猫柳  
力まない余生となりし冬銀河  
地に弾むときにもつとも落椿

三野 公子  
堀口 孝子  
木村たけま

## 作品募集（第八十七号）

☆ 全協会員・準会員

雑詠五句

☆ 締切日 令和四年十一月末日

☆ 多くの皆様のふるっての御参加を  
お願い申し上げます。

☆ 送付先

〒七五一〇八六三

下関市伊倉本町十四―三

平川扶久美 方

山口県現代俳句協会事務局

TEL&FAX 〇八三(二五四)三七三二

## 令和4年度 第2回理事会報告

- 1 日時 令和4年7月17日（日）
- 2 場所 山口市「小郡ふれあいセンター」
- 3 議案 ①第32回山口県現代俳句大会・総会の開催について  
②第40回中国地区現代俳句大会・勉強会・総会報告  
令和4年6月12日（日）岡山県倉敷市での開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のためやむなく中止とし、紙上大会として開催された。  
③第31回山口県現代俳句協会勉強会実施について  
10月12日（水）山口市（詳細は本号表紙裏参照）  
④その他、現代俳句協会員の減少対策等が話し合われた。



切り取り線

投句用紙

題名

地名

氏名


☆(十一月末日締切厳守)  
☆全会員の投句をお願いします。

投句先 〒七五一〇八六三 下関市伊倉本町十四―三  
平川扶久美方 山口県現代俳句協会事務局

電話・FAX ○八三―二五四―三七三二

## 令和4年度 山口県現代俳句協会基金状況

(敬称略)

氏名	口数	地区	氏名	口数	地区
阿部友子	1	周南	久行保徳	10	周南
井原三都子	2	光	平川扶久美	3	下関
上石久美子	2	下松	藤井邦子	2	下松
上重石峰	2	岩国	藤井八重子	2	下松
岡田薫	3	光	藤井康文	3	周南
片山淳子	3	柳井	堀口孝子	2	周南
河村加南子	1	周南	堀節誉	1	宇部
河村政夫	2	下松	榎田敦子	3	長門
河村正浩	10	下松	松原君代	2	光
木戸明子	1	下松	松本清水	2	長門
諏訪洋子	1	宇部	三野公子	2	下松
清木たかし	2	下松	森口育美	3	周南
武居絹枝	2	下松	保田尚子	2	下関
橘美泉	3	下松	安永一孝	3	山口
田村美和子	1	下松	山縣愁平	1	山口
千々和美佐子	1	下松	山下悦子	3	下松
中田裕子	2	下松	伊藤恵美子	1	周南
二歩志芳	3	小野田	木村武馬	5	周南
野村みどり	2	周南	藤井サカエ	1	下松
末広さかえ	5	山口			

(1口1,000円) 令和4年4月1日～7月15日現在

☆払込取扱票が挿入されている方は令和4年度会費1,000円お願いします。  
併せて募金のご寄付いただければ幸甚に存じます。

## ◆ 告知板

令和四年度新入準会員

白石 冨子 (下松)

藤兼 雅幸 (周南)

山根 志づ (周南)

土手 敏子 御逝去。哀悼

## ◆ あとがき

玄関の鉢植に子カマキリを見つけました。よく見るとライムグリーンの細く茂った葉の中にマシユマロ大の卵鞘があつたのです。

カマキリはギリシア語では「預言者」と呼ばれており、神さまの使者で、神さまからのメッセーヂを伝える役割を担っていると言われているそうです。カマキリの赤ちゃんを見かけたら、今やっていることやこれからやっていくことに希望をもつて進めていくとよいでしょうとのこと。また、玄関で見かけた時は、抱えている問題、悩みが早いスピードで解決するとも。様々なメッセーヂを伝えてくれる縁起の良い虫なのです。小さなカマキリのおかげでプラス思考へと繋がりに元気になることができました。

残暑の折、くれぐれもご自愛なさいますようお願い申し上げます。

(平川扶久美)

☆ 事務局 郵便番号 七五一〇八六三

住 所 下関市伊倉本町十四―三

平川扶久美 方

TEL&FAX 〇八三―二五四―三七三二

☆ 経理部 郵便番号 七四四―〇二七一

住 所 下松市米川下谷二一九

橘 美泉 方

TEL 〇八三三―五三―〇〇二五

振込口座番号

〇一三九〇―一九―〇八九〇三八

## 現代俳句やまぐち第八十六号

令和四年八月一〇日発行

発行所・山口県現代俳句協会事務局

発行人・久 行 保 徳

編集人・平 川 扶久美

印刷所・株式会社ふじたプリント社

周南市久米三九一八